

商品名 フルティフォーム50エアゾール56吸入用 添付文書情報

一般名	フルチカゾンプロピオン酸エステル・ホルモテロールフマル酸塩水和物	薬価	2017.70
規格	56吸入1瓶	区分	
製造メーカー	杏林製薬	販売メーカー	杏林製薬
薬効	2. 個々の器官系用医薬品 22. 呼吸器官用薬 229. その他の呼吸器官用薬 2290. その他の呼吸器官用薬		

フルティフォーム50エアゾール56吸入用の組成・成分

1回噴霧量中

フルチカゾンプロピオン酸エステル：50 μ g

ホルモテロールフマル酸塩水和物：5 μ g

フルティフォーム50エアゾール56吸入用の用法・用量

成人

通常、成人には、フルティフォーム50エアゾール（フルチカゾンプロピオン酸エステルとして50 μ g及びホルモテロールフマル酸塩水和物として5 μ g）を1回2吸入、1日2回投与する。なお、症状に応じてフルティフォーム125エアゾール（フルチカゾンプロピオン酸エステルとして125 μ g及びホルモテロールフマル酸塩水和物として5 μ g）を1回2～4吸入、1日2回投与する。

小児

通常、小児には、フルティフォーム50エアゾール（フルチカゾンプロピオン酸エステルとして50 μ g及びホルモテロールフマル酸塩水和物として5 μ g）を1回2吸入、1日2回投与する。

【用法及び用量に関連する注意】

症状の緩解がみられた場合は、治療上必要最小限の用量を投与し、必要に応じ吸入ステロイド剤への切り替えも考慮すること。

フルティフォーム50エアゾール56吸入用の効能・効果

気管支喘息（吸入ステロイド剤及び長時間作動型吸入 β 2刺激剤の併用が必要な場合）。

【効能又は効果に関連する注意】

1. 患者、保護者又はそれに代わる適切な者に対し次の注意を与えること。本剤は発現した発作を速やかに軽減する薬剤ではないので、急性の発作に対しては使用しないこと。

2. 本剤の投与開始前には、患者の喘息症状を比較的安定な状態にしておくこと。特に、喘息発作重積状態又は喘息の急激な悪化状態のときには原則として本剤は使用しないこと。

フルティフォーム50エアゾール56吸入用の副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

1. 重大な副作用：

- 1) ショック、アナフィラキシー（いずれも頻度不明）：ショック、アナフィラキシー（呼吸困難、気管支攣縮、全身潮紅、血管浮腫、蕁麻疹等）があらわれることがある。
- 2) 重篤な血清カリウム値低下（頻度不明）：キサンチン誘導体併用、ステロイド剤併用及び利尿剤併用により血清カリウム値低下増強することがあるので、重症喘息患者では特に注意すること。
- 3) 肺炎（0.42%）。

2. その他の副作用：

- [1] 口腔・呼吸器：（5%以上）嘔声、（1～5%未満）口腔感染症・呼吸器感染症、口腔症状（口腔疼痛、口腔不快感）・咽喉頭症状（咽喉頭疼痛、咽喉頭不快感）、喘息、口内炎、（1%未満）口腔内乾燥、（頻度不明）咳嗽、味覚異常。
- [2] 消化器：（頻度不明）悪心、嘔吐。
- [3] 循環器：（1～5%未満）不整脈、動悸、（1%未満）心電図異常、高血圧。
- [4] 肝臓：（1%未満） γ -GTP増加、ALT増加、血中ビリルビン増加。
- [5] 精神神経系：（1%未満）振戦、めまい。
- [6] 過敏症：（1%未満）発疹・蕁麻疹。
- [7] その他：（1～5%未満）CK増加、（1%未満）血中コルチゾール減少、白血球数増加、倦怠感、筋痙縮、胸部不快感。

フルティフォーム50エアゾール56吸入用の使用上の注意

【禁忌】

1. 有効な抗菌剤の存在しない感染症、深在性真菌症の患者〔ステロイドの作用により症状を増悪させるおそれがある〕。
2. 本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者。
3. デスモプレシン酢酸塩水和物投与中＜男性における夜間多尿による夜間頻尿＞の患者。

【重要な基本的注意】

1. 本剤は既に起きている気管支喘息の発作を速やかに軽減する薬剤ではないので、毎日規則正しく使用すること。
2. 過度に本剤の使用を続けた場合、不整脈、場合により心停止を起こすおそれがあるので、用法・用量を超えて投与しないよう注意すること。また、患者に対し、過度の使用による危険性について理解させ、用法・用量を超えて使用しないよう注意を与えること。
3. 本剤の投与期間中に発現する急性の発作に対しては、短時間作動型吸入 β 2刺激剤等の他の適切な薬剤を使用するよう患者に注意を与えること。また、短時間作動型吸入 β 2刺激剤等の使用量が増加したり、あるいは効果が十分でなくなってきた場合には、喘息の管理が十分でないことが考えられるので、可及的速やかに医療機関を受診し医師の治療を求めるよう患者に注意を与えること。薬剤の使用量が増加したりあるいは効果が十分でなくなってきた状態では患者の生命が脅かされる可能性があるため、患者の症状に応じてステロイド療法の強化（本剤のより高用量製剤への変更等）を考慮すること。

4. 感染を伴う喘息症状の増悪がみられた場合には、ステロイド療法の強化と感染症の治療を考慮すること。
5. 本剤の投与を突然中止すると喘息の急激な悪化を起こすことがあるので、投与を中止する場合には患者の喘息症状を観察しながら徐々に減量すること。
6. 全身性ステロイド剤と比較し可能性は低いが、吸入ステロイド剤の投与により全身性作用（クッシング症候群、クッシング様症状、副腎皮質機能抑制、小児成長遅延、骨密度低下、白内障、緑内障を含む）が発現する可能性があるため、吸入ステロイド剤の投与量は患者毎に喘息をコントロールできる最少用量に調節すること。特に長期間、大量投与の場合には定期的に検査を行い、全身性作用が認められた場合には患者の喘息症状を観察しながら徐々に減量するなど適切な処置を行うこと。
7. 全身性ステロイド剤の減量は本剤吸入開始後症状の安定をみて徐々にすること（減量にあたっては一般のステロイド剤の減量法に準ずること）。
8. 本剤を含む吸入ステロイド剤投与後に、潜在していた基礎疾患である好酸球性多発血管炎性肉芽腫症にみられる好酸球増多症がまれにあらわれることがあるが、この症状は通常、全身性ステロイド剤の減量並びに離脱に伴って発現しており、本剤との直接的な因果関係は確立されていない（本剤の投与期間中は、好酸球数の推移や、他の好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の症状（しびれ、発熱、関節痛、肺の浸潤等の血管炎症状等）に注意すること）。
9. 全身性ステロイド剤の減量並びに離脱に伴って、鼻炎発現・鼻炎増悪、湿疹発現・湿疹増悪、蕁麻疹発現・蕁麻疹増悪、めまい発現・めまい増悪、動悸発現・動悸増悪、倦怠感発現・倦怠感増悪、顔のほてり発現・顔のほてり増悪、結膜炎発現・結膜炎増悪等の症状があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には適切な処置を行うこと。
10. 本剤は患者の喘息症状に応じて最適な用量を選択する必要があるため、本剤の投与期間中は患者を定期的に診察すること。

【合併症・既往歴等のある患者】

1. 結核性疾患の患者：ステロイドの作用により症状を増悪させるおそれがある。
2. 感染症＜有効な抗菌剤の存在しない感染症・深在性真菌症を除く＞の患者：ステロイドの作用により症状を増悪させるおそれがある。
3. 甲状腺機能亢進症の患者：甲状腺ホルモンの分泌を亢進させるおそれがある。
4. 高血圧の患者：血圧を上昇させるおそれがある。
5. 心疾患のある患者： β 1作用により症状を増悪させるおそれがある。
6. 糖尿病の患者：グリコーゲン分解作用及びステロイドの作用により症状を増悪させるおそれがある。
7. 低カリウム血症の患者： Na^+/K^+ ATPaseを活性化し細胞外カリウムを細胞内へ移動させることにより低カリウム血症を増悪させるおそれがある。
8. 気管支粘液の分泌が著しい患者：本剤の肺内での作用を確実にするため、本剤の吸入に先立って、分泌がある程度減少するまで他剤を使用すること。
9. 長期又は大量の全身性ステロイド療法を受けている患者：全身性ステロイド剤の減量中並びに離脱後も副腎皮質機能検査を行い、外傷、手術、重症感染症等の侵襲には十分に注意を払い、また、必要があれば一時的に全身性ステロイド剤の増量を行うこと（これらの患者では副腎皮質機能不全となっていることが考えられる）。
10. 低酸素血症の患者：血清カリウム値をモニターすることが望ましい（低酸素血症は血清カリウム値の低下が心リズムに及ぼす作用を増強することがある）。

【肝機能障害患者】

- 1) 重度肝機能障害患者：本剤の成分であるフルチカゾンプロピオン酸エステル及びホルモテロールはいずれも主に肝臓で代謝されるため、血中濃度が上昇する。

【妊婦】

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること（フルチカゾンプロピオン酸エステル1.6 μ g/kg以上/ホルモテロールフマル酸塩水和物0.16 μ g/kg以上をウサギに吸入投与したときに、胎仔発育抑制及び催奇形性が認められている）。

【授乳婦】

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること（ラットにおいて、フルチカゾンプロピオン酸エステル及びホルモテロールは乳汁への移行が報告されている）。

【小児等】

- 1) 長期間投与する場合には、身長等の経過の観察を十分行うこと。また小児等の使用にあたっては、使用法を正しく指導すること。全身ステロイド剤と比較し可能性は低いが、吸入ステロイド剤を特に長期間、大量に投与する場合に成長遅延をきたすおそれがある。なお、小児等に対しては国内での24週間を超える臨床試験は実施していない。
- 2) 低出生体重児、新生児、乳児又は5歳未満の幼児を対象とした臨床試験は実施していない。

【高齢者】

患者の状態を観察しながら慎重に投与すること（一般に生理機能が低下している）。

【相互作用】

フルチカゾンプロピオン酸エステルは、主として肝チトクロームP-450 3A4（CYP3A4）で代謝される。

1. 併用禁忌：デスモプレシン酢酸塩水和物<男性における夜間多尿による夜間頻尿><ミニリンメルト> [低ナトリウム血症が発現するおそれがある（機序不明）]。
2. 併用注意：
 - [1] CYP3A4阻害作用を有する薬剤（リトナビル等） [副腎皮質ステロイド剤を全身投与した場合と同様の症状があらわれる可能性がある（CYP3A4による代謝が阻害されることにより、フルチカゾンプロピオン酸エステルの血中濃度が上昇する可能性がある）。特に、リトナビルとフルチカゾンプロピオン酸エステル製剤の併用により、クッシング症候群、副腎皮質機能抑制等が報告されている（CYP3A4による代謝が阻害されることにより、フルチカゾンプロピオン酸エステルの血中濃度が上昇する可能性がある）]。
 - [2] カテコールアミン（アドレナリン、イソプレナリン等） [不整脈、場合によっては心停止を起こすおそれがあるので、副作用の発現に注意し、異常が認められた場合には減量又は投与を中止するなど適切な処置を行うこと（併用により、アドレナリン作動性神経刺激の増大が起きる。そのため、不整脈を起こすことがある）]。
 - [3] キサンチン誘導体（テオフィリン、アミノフィリン等） [低カリウム血症による不整脈を起こすおそれがあるので、血清カリウム値のモニターを行うことが望ましい（キサンチン誘導体はアドレナリン作動性神経刺激を増大させるため、血清カリウム値の低下を増強することがある）]。
 - [4] ステロイド剤（プレドニゾン、ベタメタゾン等） [低カリウム血症による不整脈を起こすおそれがあるので、血清カリウム値のモニターを行うことが望ましい（ステロイド剤及び利尿剤は尿細管でのカリウム排泄促進作用があるため、血清カリウム値の低下が増強することが考えられる）]。
 - [5] β 遮断剤（アテノロール等） [ホルモテロールの作用を減弱する可能性がある（ β 受容体において競合的に拮抗する）]。
 - [6] QT間隔延長を起こすことが知られている薬剤（抗不整脈剤、三環系抗うつ剤等） [QT間隔が延長され心室性不整脈等のリスクが増大するおそれがある（いずれもQT間隔を延長させる可能性がある）]。

【過量投与】

1. 症状：ホルモテロールフマル酸塩水和物の過量投与により、動悸、頻脈、不整脈、振戦、頭痛及び筋痙攣等、 β 刺激剤の薬理学的作用による全身作用が発現する可能性がある（また、重篤な症状として、血圧低下、代謝性アシドーシス、低カリウム血症、高血糖、心室性不整脈あるいは心停止等が発現する可能性がある）。フルチカゾンプロピオン酸エステルの過量投与（通常の用法・用量を超える量等）により副腎皮質機能抑制等の全身性作用がみられることがある（副腎皮質機能が抑制されている患者においては、外傷、手術、感染、本剤の急速な減量時等に急性副腎皮質機能不全が発現する可能性がある）。
2. 処置：過量投与後に本剤を減量する際は、患者の管理を十分に行いながら徐々に行うこと。

【適用上の注意】

1. 薬剤交付時の注意：

1) 吸入前：

- (1) 本剤の投与にあたって、吸入器の操作法、吸入法等を十分に説明すること。
- (2) エアゾール剤の噴霧と吸入の同調が難しいと考えられる患者にはスパーサー（吸入用補助器）を使用させることが望ましい。

2) 吸入時：良く振ってから使用させること。

3) 吸入後：口腔カンジダ症又は嘔声の予防のため、本剤吸入後に、うがいを実施するよう患者を指導する（ただし、うがいが困難な患者には、うがいではなく口腔内をすすぐよう指導する）。

4) 保管時：

- (1) 内側のアルミ容器をアダプターから外さないこと。
- (2) 噴霧口のつまりを避けるため、少なくとも週1回以上アダプターの吸入口の外側と内側を乾いた布やティッシュペーパーでよく拭き、清潔に保管すること。
- (3) アルミ容器は絶対に濡らさない（噴霧口がつまる原因となる）。

【取扱い上の注意】

1. 30℃以上の場所に保管しないこと。
2. アルミ容器は火中に投入しないこと。
3. 地方自治体により定められたアルミ容器の廃棄処理法に従うこと。

【保管上の注意】

室温保存。



薬学をはじめとする専門知識と情報処理技術が実現する高い信頼性と豊富な情報量

医薬品データベースの決定版 『 DIR 』